聖家族　B 年

ルカ 2・22-40

2023.12.31　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日、わたしたちは聖家族の祝日のごミサをお捧げしています。

今日の福音ではイエスの両親というふうに書かれています、マリアとヨセフが幼子のイエス様を律法の定めに従って神殿に連れて来たという、その場面が朗読されました。マリア様とヨセフ様は律法に従っているということが強調されています。「モーセの律法に定められた」（ルカ 2・22）、また、「主の律法に…書いてあるからである」（ルカ 2・23）、「主の律法に言われているとおりに」（ルカ 2・24）っていうふうに 3 回強調されているんです。その主の律法に従って神殿にやって来たマリアとヨセフが出会ったのは、聖霊に満たされて、聖霊に導かれているシメオンという老人だったわけです。イエス様を中心にして、律法と、そして聖霊に導かれるという、そのことを通して異なる背景、異なる世代の人が出会うということになっています。また、このあとでは、老預言者のアンナっていう女性もイエス様のもとにやって来ることになります。

律法は世代を超えて信仰を伝えていく。また、多くの人が神様に向かうための助けとなる一つの枠組みであり道具であります。しかし、その律法が聖霊に導かれるということがなければ、イエス様のもとにわたしたちを導いてはくれないわけです。

このあと、今日の福音では神殿で聖霊に導かれた人がイエス様をお迎えしました。しかし、イエス様が大人になったあとでは、今日のシメオンの言葉が暗示しているように、神殿を司（つかさど）る人たちは聖霊に導かれるのではなく、自分の思いで律法を用いていたので、イエス様を拒絶した、十字架に付けました、というふうにお話が進んでいくということになります。

わたしたちは個人のレベルでも、また共同体のレベルでも、律法というか、共通の枠組みと、そして一人ひとりが固有の恵みによって神様に導かれる、その導きに心を開く、この両方の面が大切であるということになります。勿論、お祈りの中で一人ひとりは神様との個人的な繋がりを生きます。どんなことでも神の前に打ち明けて良い

し、どんなことでも話して良い。しかしそれだけでは、聖霊に導かれていると言いながら、いつの間にか自分の思いを神様に乗っけていっているというふうに、自分の中に閉じ籠る危険があるわけなんです。

そのために、今度は、わたしたちは共通の言葉になっている祈り、主の祈りを始めとして、アヴェ・マリアの祈りもそうです。また、たとえばフランシスコの平和を求める祈りとか、マザー・テレサの祈りとか、ずうっと言葉になって、そして伝えられて、共通に大切にされている祈りっていうことを唱えることで、わたしたちが信仰の大切なことに気付かされるし、また自分自身の心が、視野が拡げられることになるでしょう。

言葉の決まった祈りを唱えていれば良い、というのではない。しかし、一方で自分の心の中で自由に神様と対話していればそれだけで良い、と言うことでもないわけなんです。決まった祈りを唱えるときでも、そのことがわたしたちの人生の今ここでどのように恵みを通して実現するのか、ということを絶えず神様に聞き従う思いで唱える必要もあるわけです。

教会全体としてもまた、わたしたちが共通に大切にするっていうことを通して、世代を超えて背景を超えてイエス様のもとに集められるけれども、そのわたしたちが「今この時に大切なことっていうのは何ですか」って絶えず神様の導きを聖霊の助けのうちに願い求め続けないと、イエス様を律法の名のもとに十字架に付けた人たちと同じようになるかもしれません。

イエス様がこの世に来られたのは、あたかもミサの中で聖別されるそのパンは尊いものだから人間はその前で恭（うやうや）しい態度を取らなければならない、そのことを伝えるためにみことばは人となられた、かのように勘違いする可能性はあるわけです。わたしたちが御聖体を大切にするのは、その御聖体を通してわたしたちを生かそうとされる、一人ひとりが神様の前に見捨てられて良いということは決してないのだということを示される、イエス様の思いと生き方、そしてそのためだったらご自分の命をいくらでもわたしたちに与えようとされる、そのイエス様ご自身を、その思いを、その生き方を忘れないために大切にする。他のものと全く同列にすることができないぐらい大切であるということを忘れないために、典礼を通して、また、教会の中のルールとして、御聖体そのものも――それをないがしろにしていいわけはないんです――大切にいたします。しかし、そこに籠められたイエス様の今この場でわたしたちを導こう

とされる思いに聞き従うという姿勢がないならば、聖霊の助けを願わないならば、まさにそれはイエス様の思いをかえってないがしろにしてしまう。態度としては恭しいけれども、その思いに対しては無関心である。根本的な意味での涜聖（とくせい）――聖なるものを汚す――それに陥る可能性があると言わなければならないわけです。

わたしたちがお祝いしている「聖家族」の祝日は、イエス様に結ばれて、そしてイエス様の恵みを通してお互い同士が結ばれていく、神の家族として呼ばれている、ということを思い起こすそのためです。教会の枠組みの中に聖霊が絶えず生き生きとわたしたちを導いてくださる、そのことを信頼して、今日も典礼という一つの世界共通の枠組みの中で、一人ひとりそしてまたこの場において、わたしたちに与えられる聖霊の恵み、イエスとの出会い、そしてイエスを通して互いが出会っていく、その恵みを願いながら、このごミサを通して互いのために祈り合いたいと思います。

――

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi

携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/